

群 教 セ	G10 - 01 平 18.233 集
-------------	------------------------

学年会での指導案検討、情報交換で道徳の 授業内容の充実を目指す取組

——シートに書いた意見をもとに授業のねらいを明確化することを通して——

特別研修員 茂木 昭 （藤岡市立北中学校）

本研究は、学年会で道徳の授業の指導案検討をするときに、授業の中心となる部分で1枚のシートに全教師が自分の意見を書いていくことで授業のねらいを明らかにしていこうというものである。授業のねらいを明確にして生徒の多様な考えに対して、教師が基本的な対応の考え方をもち、授業のねらいに近づけようとする。そして授業後は発問や生徒の反応と教師の対応について情報交換することで、授業内容の充実を目指した実践報告である。

キーワード 【 道徳 中学校 授業改善 授業づくり 】

I 主題設定の理由

1 生徒のねがい

本校3年生では、4月の最初に『心のノート』8、9ページにある「23の心の鍵」の部分を使い、生徒の個人や学年全体の思いを明らかにするために、記名式でアンケートを行った。

(1)アンケート①「この1年、生徒自身が大切にしたいと思っていること」

学年全体では、「目標や希望に向かい勇気を持って生き抜く」という気持ちを大切にしたい生徒が48%であった。これは受験という目標に向かって努力したいという3年生ならではの結果といえる。

次に「理解し合い、高め合える友に出会う」という気持ちを大切にしたいという生徒が25%であった。3年生は友人関係で悩む生徒が比較的少なく、友達との関係を大切にしている生徒が多いからこのような結果になったと考える。

(2)アンケート②「北中生として育てたいこと(今はできていないこと)」・p2の表1を参照

2学級が「学校を愛しよりよい校風をつくる鍵」が高く、2学級が「個性や立場を尊重して、他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ鍵」が高く、1学級が「法や決まりの意義を理解し社会の秩序と規律を高める鍵」の割合が高かった。3年生全体を見て

も「学校を愛しよりよい校風をつくる鍵」が25%であった。

次に「法や決まりの意義を理解し社会の秩序と規律を高める鍵」が20%、そして「個性や立場を尊重して、他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ鍵」が18%であった。

このような3年生全体の傾向から、周りの人のことを考えて行動できるようになることが生徒からみた自分達の課題であり、生徒の発達段階からも中学校3年生に必要な資質と考える。

2 教師のねがい

3年生の教師は学年主任を中心として学年組織としてしっかりとまとまり、担任副担任の区別なくそれぞれの教師が個性を發揮しながら組織的に指導にあたっている。

3年生の学年教育目標の1つに「集団の向上が個人の向上につながる」を設け、集団の力を伸ばすことを通して個人の力を伸ばせるように指導している。これは、卒業後は社会に対して個人として責任を負って生きていかなければならない生徒にとって必要な資質であり、中学校3年生だからこそ生徒自身が気づき伸ばすことができる資質と考える。

3年生という集団を通して生徒一人一人の資質を伸ばすためには、教師が学年集団としてどのよ

うに関わり、道徳の授業内容を充実させていくことが主題に迫ることに有効か本校の実践の中から検証していきたい。

表1 「北中生として育てたいこと(今はできていないこと)」は何ですか」

	鍵 番号	1 組	2 組	3 組	4 組	5 組	計	%
自分 自身	1	1				1	2	1
	2	2		5			7	4
	3	3		2	2		7	4
	4				1	1	2	1
	5	1					1	1
他の 人との かわり	6				4		4	2
	7						0	0
	8		1			4	5	3
	9					4	4	2
	10	5		13	14	1	33	18
高 な もの	11	3	2				5	3
	12						0	0
	13		1				1	1
集 団 や 社 会 と の か か わ り	14	2	8	1		1	12	6
	15	3	5	5	10	15	38	20
	16	1					1	1
	17	7	1			1	9	5
	18		2	2	1	1	6	3
	19				3		3	2
	20	8	17	10	2	9	46	25
	21						0	0
	22				1		1	1
	23						0	0
		36	37	38	38	38	187	

注：『心のノート』『23の鍵』（心のノートp8・9）のアンケート結果。表中の「鍵番号」は、『心のノート』の中にある項目に本校で独自に設定した番号を示している。詳細は資料編に示す。数値は%の列を除き、各学級と学年の数値は人数を表している。

II 研究のねらい

指導案検討の中での全教師が1枚のシートに授業の中心となる発問や予想される生徒の反応と教師の対応などについて自分の意見を書き、授業のねらいを明確にする。そして授業終了後、生徒の反

応など授業の中心となる部分を中心に情報交換することで授業内容の充実を目指すことをねらいとする。

III 研究の見通し

1 学年会で指導案検討をするときに、学年の全教師で発問と生徒の反応などを話し合う。授業の中心となる部分では1枚のシートに各教師の意見を書き出していき授業のねらいを明確にする。そうすることで、生徒の多様な意見に対して教師の基本的な対応が明確になり授業のねらいに迫ることができるであろう。

2 授業後の情報交換で、発問への生徒の反応や教師の対応について検証することで研究のねらいに迫ることができるであろう。

IV 研究内容

1 学年会での指導案検討

(1)学年教師の経験や持ち味を生かし、授業のねらいを明確にして授業内容を多面的に検討する。

学年会での指導案検討では、より充実した授業内容を求め全教師で活発に意見を出し合っている。中心発問や予想される生徒の反応など授業の中心となる部分では、1枚のシートに学年の全教師が自分の意見を書いていく。これは授業のねらいを明確にするとともに、教師が書くことで自分の考えが整理でき、書き出された意見の中から新しい発想が生まれることにもつながっていくと考える。そして、授業のねらいが明確になることで、生徒の多様な意見に対して生徒の心を揺さぶる対応ができるようになり心の成長につながると考える。また他の教師の意見を肯定的にとらえながら検討することがより活発な指導案検討となり、研究のねらいにつながると考える。

(2)授業後の情報交換

実践した授業を次の授業に生かすために、授業後に情報交換をする。この情報交換では、始めに授業のねらいを確認して、授業全体とねらいに対してどのような生徒の反応や教師が対応したかなどについて話し合う。

これは学級ごとに生徒の実態が異なるため、全ての学級が同じ展開で授業を実施しても生徒の反応は違ってくる。担任はその生徒の多様性を生かし

ながら、学校、学年、学級などの目標に近付けようとしている。そのため各学級の生徒が出した意見について学年の全教師で情報交換することで、生徒の多様な意見に対応しながら授業のねらいに近付けるように話し合うことが授業内容の充実につながると思う。

2 実践

(1) 資料選定と指導案作成にあたって

資料選定と指導案の作成は、学年教師の輪番制で行っている。また本校では月ごとの学校行事、生徒指導、道徳を合わせた生活目標が決められている。本校ではこれをステージ制（表2を参照）と呼んでいる。資料選定では、月ごとの目標を確認するとともに、学校、学年の行事、生徒の実態や課題などについても合わせて検討し、ステージ制のねらいに沿った資料の選定をしている。

表2 ステージ制

	月	テーマの概要
1学期	4	新しい友達や先生との出会いを通して、新たな決意を持たせ学級の結束力を高める【出会いのステージ】
	5	学習習慣、基本的な生活習慣の確立と自律性を高める【自律のステージ】
	6	学校づくりへの自覚と意欲を喚起し、球技大会へ向けてクラスの団結力と協働性を養う【協働のステージ】
	7	中体連各行事へ向けて具体的な努力を引き出す【挑戦のステージ】
2学期	8	自己実現に向けて鍛錬し、感動体験させる【鍛錬のステージ】
	9	行ことを通して1つの目標に向かい学級を1つにする【創造のステージ】
	10	新体制に移行することで他者と交流し、自己を高める【対話のステージ】
	11	今年度の取組を振り返り、新年に向け新たな目標を立てる【向上のステージ】
3学期	12	総仕上げの学期を意識し新年をスタートさせる【立志のステージ】
	1	自己の志や目標を実践、実行させる【実践のステージ】
	2	来るべき次のステージを意識させる【アクセスのステージ】

ステージ制では、学校行事や生徒の成長に合わ

せて月ごとに中心テーマを設定して、様々な角度から集中的に扱っている。本校の心の教育は、道徳、生徒指導、人権教育を連携させることで内容の充実を目指している。道徳ではステージ制のテーマについて、複数週にわたり授業を行うことがある。そこで学年会で指導案検討することが授業内容だけでなく、前後週の授業とのつながりを確認しながら検討することになる。

11月上旬に行われる道徳の授業は、3年生にとって重要な三者面談を控えた時期である。そこで学年会で進路と関係のある資料を選定することを決めた。

生徒はそれぞれ自分の進路への思いがあり、保護者にも自分の子どもへの思いがある。それをしっかりと親子で話し合うことで、生徒が自分で進路を決定することができるようになると考え、次の資料が指導案作成担当の教師から提案された。

「最終決定」(『モラルジレンマ資料と授業展開』荒木紀幸編著 明治図書)。この資料は、父親と主人公(中学校3年生の女子生徒)の進学に対する意見が合わないまま秋の三者面談に臨む、という話である。主人公の心の動きや行動を通して自分自身を振り返り、進路を自分の考えだけで決める、親の言うとおりに高校を決める、というのではなく親子でしっかりと話し合っただけで進路を決めていく心情を育てることで、3年生全体の進路に対する気持ちを高めることにもつながるのではないか、という指導案作成担当教師の提案によりこの資料を学年会で検討した。

ア 生徒の考えを育てられると思う点

- 高校説明会や見学会に実際にいっているため高校の様子が理解できるようになり、生徒は自分の進路と重ね合わせて真剣に考え、自分の考えの変化に気付くであろう。

イ 生徒の考えを育てられないと思う点

- 2年生の時に1度実施しているため生徒の資料への関心が低くなり、真剣に考えなくなってしまうであろう。

この資料で進路に対する考えを深められるという意見と、深めることは難しいという両方の意見がでた。そこで、生徒の考えを深められないという意見が出たからこの資料を扱わないというのではなく、どのようにすれば1度使った資料でも生徒の考えを深められるか前向きに検討することに

した。

そこで以下の意見が出てきた。

- 周りの人の進路への考え方を知り 2 年生の時と今の自分を振り返ることが、自分を高めることにもつながるのではないか。そのために、それぞれの生徒の気持ちを揺さぶりながら生徒の多様な意見を出させることが必要なのではないか。

この意見により本資料は、生徒が自分の体験を通して進路について考えやすく、発問や生徒への対応を検討することで授業のねらいに近付けられるという学年会の判断で授業を実施することにした。

一人で考えていた時は両方の立場の意見を考えることができたとしても、その意見にどのように対応したらよいか分からない時がある。しかし、このように学年の全教師で検討することで生徒の実態がはっきりと見えるとともに、授業を多面的に検討することにつながると考える。

(2) 学年会(指導案検討)

ア 展開の検討

資料決定から 2 週間後の学年会で、指導案作成担当教師が提出した指導案について検討する。最初に、資料を読み提案された発問で授業のねらいにせまることができるか検討する。

提案された指導略案(原案)

授業のねらい 進路決定に際して自分の考えだけでなく保護者ともしっかりと話し合っ、互いの気持ちを理解しながら自分で進路を決めていこうという気持ちを育てる。	
導入	三者面談を控えての今の気持ちを振り返る。
展開	教師による資料範読を聞く。 発問 1 「資料の主人公は、どの高校にいけばよいか。理由も考えよう。」 ・高校別に意見を発表する。その後は教師の司会で自由に意見を言う。
まとめ	生徒は感想を書く。 教師によるまとめの話を聞く。

これは主人公の考えを通して自分自身を振り返

る資料であり、発問を通して主人公の気持ちの変化について考えるという資料ではない、という学年会の判断で発問は変更しないことにした。しかしこの原案では、次のような点が課題となり、対応を検討した。

- ① 発問に対する生徒の活動が 1 つだけである。意見を出すだけでは、その意見をどのように整理していくことでねらいにせまれるのが不明確である。

↓

【対応】

- ・ 周りの生徒の意見を聞き、自分の意見の変化などを書く活動を取り入れることで自分の意見を整理できるようにする。

- ② 自由な意見発表だけで生徒の考えが深まるのか。意見の羅列だけでは、自分の意見だけが正しいということにもつながりかねないのではないか。

↓

【対応】

- ・ 自分の意見と他の生徒の意見を比べることで、自分の考えを深められるような生徒の活動にする。
- ・ 教師がいろいろな立場の意見を出させるようにする。予想として「私立 A 高校を受験する」という生徒が多いだろうから、他の高校を受験する生徒の意見を出させるように指名することが大切となる。

- ③ 友達意見を聞いていて考えが変わった生徒はどうするのか。意見が変わったことに気付かせるために自分を振り返らなくて良いのか。

↓

【対応】

- ・ ワークシートに新しく枠を追加することで、最初に書いた意見との変容が分かるようにして、生徒が自分自身を振り返りやすくする。
- ・ ワークシートに記入する時間を考えながら話を進めないと時間が不足して、まとめができなくなるので気を付ける。

よって、次のような展開で生徒の活動を追加することが授業のねらいに近付けられるようになる

であろう。

展開	教師による資料範読を聞く 発問1 「主人公は、どの高校にいけばよいか。理由も考えよう。」
	・ 学校別に意見を発表する。その後は教師の司会で意見を言う。 ・ 最初に考えた自分の意見と、話を聞いて考えが変わった人は、どの学校にどのような理由で変わったか。また受験する高校は変わらなかったが、受験の理由が変わった人はその意見をワークシートに書く。または友達の見解の中で共感した意見をワークシートに書くことで自分の考えを整理する。

イ 予想される生徒の反応についての検討

次に予想される生徒の反応について検討することにした。ここでは大きく分けて2つの事について検討することにした。1つ目は、私立A高校を受験するという場合である。2つ目は、県立B高校を受験する場合である。両者ともいろいろな意見が出てくることが予想された。そこで今回はこの意見への教師の対応によって生徒の考えが深められるかどうかにつながると考え、1枚のシートに全教師が自分の意見を書き込むことにした。

○私立A高校を受験した方がいい、という場合

【予想される生徒の反応】

- ・ 自分のいきたい高校を受験するのが一番にいい

【教師の対応（原案）】

- ・ 弟と妹はどうするのか。

【書き出された教師の対応。（重複有り）】

- ・ 友達がいくという理由でいいのか。
- ・ 自分にあっているという校風とはなにか。
- ・ 高校は何をすところなのか。
- ・ そこまで演劇をやりたい理由はなにか。

原案では、家庭の経済的なことで生徒の気持ちを揺さぶることを想定した。しかし書き出された教師の対応は別の観点が見られた。父親に対して生徒の私立A高校に行きたいという気持ちを整理させるために、高校について具体的な内容で揺さぶることが必要である、というものである。これはどの教師も共通した思いがあるためこのようになったと考える。

私立A高校を受験したいという生徒の気持ちは教師としても理解できる。しかし自分が受験したいと言っているだけでなく、なぜ受験したいのかということ父親と何度でも話し合っ互いに納得した上で進路を決定してもらいたい。主人公と父親の話合いは十分できていない。このような親子の状態は現実問題としてあり得る。またこの状態までいかななくても、中学生という発達段階を考えると、自分がなぜその高校を受験したいかを親にはっきりと伝えていない生徒がいると考えられる。だからこそ親としっかりと話し合ってもらいたい、という思いが学年の教師の共通していることがわかった。そのため、他の反応が出てきても、この教師の思いを基本に対応していくことした。

○県立B高校を受験した方がいい、という場合

【予想される生徒の反応】

- ・ 家の経済的な事情だからあきらめる

【教師の対応（原案）】

- ・ 演劇はやりたくないのか。

【書き出された対応（重複有り）】

- ・ 3年間勉強に縛られる生活に耐えられるか。
- ・ 自分に合っていないかもしれない高校で3年間生活して楽しいか。
- ・ 仲の良い友達と離れてしまってもいいのか。
- ・ 応援してくれる母親の気持ちはどうするのか。A高校をあきらめていいのか。
- ・ 父親の言う通りでいいのか。

ここでは、原案と書き出された教師の対応に共通点が見られた。それは、人生やりたいことだけできるわけではなく、できたとしても何の問題もなくやり遂げることはほとんどない。別に道に進んでも、その場所で自分の新しい道を切り開いていける人になって欲しい。発想の転換や前向きな考えでこれからの人生を過ごして欲しいという共通の思いがあったためこのようになったと考える。

つまり、父親の言う通りに県立B高校を受験したことを後悔して欲しくない、たとえB高校に進学してもその中で自分のやりたいことなどを見つけて、新しい道を切り開いていける力を身につけて欲しい、自分のやりたいことを貫くためにはどうしたらよいか考えて欲しい、という思いが学年の教師の共通の思いであることがわかった。そのため、他の反応が出てきても、この教師の思いを

基本に対応していくこととした。

(3) 授業

資料を通して生徒が自分自身を振り返り、それぞれの立場の生徒の意見と教師の対応を聞いていく中で授業のねらいに気付くようになることを目的としている。そのため、予想された生徒の反応に対してどのように教師が対応したか、予想外の生徒の反応に対しても教師がどのように対応したか、それを受けて生徒はどのようなことを考えたか、それにより授業のねらいに近付けられたかについて検証する。

実際の授業で出た生徒の反応と教師の対応

これらの生徒の反応に対して、教師がどのように対応することで授業のねらいに迫ろうとしたのかについて以下に述べる。①と②は授業前の指導案検討のときに予想された生徒の反応と教師の対応である。③と④は予想外の生徒の反応と教師の対応である。

①「私立A高校」を受験する

【生徒の反応】

・ やりたいことがあるのだから、自分のいきたい高校を受験する。

【教師の対応】

・ 家の事情を考えず、自分がいきたい高校を受験するというだけでいいのか。

【生徒の感想】

・ やりたいことは変えられないけど、A高校にはいきたいから自分も何かを我慢する。

②「県立B高校」を受験する（検討の範囲内の場合）

【生徒の反応】

・ 家の事情だから、私立A高校はあきらめて、県立B高校を受験する。

【教師の対応】

・ 母親が応援してくれるという気持ちはどうするのか。

【生徒の感想】

・ 母親が応援してくれるのは嬉しい。でも家の事情を考えると高校は我慢する。大学に行くときには自分の希望の学校にいかせてもらう。

③「私立A高校」を受験する

【生徒の反応】（検討の範囲外の反応）

・ なぜA高校に行きたいかを父としっかり話し合

って理解してもらうように努力する。

【教師の対応】

・ どうやって説得するか。

【この対応の理由】

・ 生徒は簡単に話し合うと簡単に言うが、どのようにすればよいか考えていることは少ない。そのため自分自身に置き換えて考えることで、ねらいに近付けられると考えたため。

【生徒の感想】

・ A高校にいきたいと言うだけでは、親は納得してもらえないし、せっかく合格しても心からうれしいとは思えない気がする。自分は高校で何をしたいのかももう一度考えたい。それから親を説得できるようにする。

④「県立B高校」を受験する

【生徒の反応】

・ 県立B高校で、演劇を始めればいい

【教師の対応】

・ A高校へ行きたいのか。A高校で演劇がしたいのか。それとも演劇がしたいのか。

【この対応の理由】

・ 高校へいくことの目的を整理することで、どの高校に進学しても自分を生かす道を切り開いていけるようにするため。

【生徒の感想】

・ 自分は高校で何がしたいかはっきりとしていなかったけど、もう一度どんなことをしたいか考えてから高校を決めたい。

生徒の反応は指導案検討の時に予想した以上に多様な意見が出てきた。それに対して基本的な対応が明確になっているために、担任は1つ1つの意見に対してしっかりと対応して授業を進めることができたと考える。

(4) 授業後の情報交換

授業後は、最初に授業のねらいを確認する。そして授業全体の感想とねらいに対する生徒の反応や教師が対応について情報交換した。

私立A高校

・ 全体的には自分が受けた学校（私立A高校）を受験する、親の考えは関係ないという意見が多かった。しかし、授業のねらいとして生徒が保護者としてしっかりと話し合うようにする、というねらいでそれぞれの生徒の気持ちを揺さぶっ

たことで、生徒はしっかりと自分の進路について考えるようになった。その上で、三者面談を前にもう一度しっかりと親と話し合いたいという生徒が多かった。

- ・ 予想外の生徒の反応が出てねらいが明確になっていたので生徒の心を揺さぶる対応ができ、生徒は進路について親と真剣に向き合っているようになった。

県立B高校

- ・ B高校を受験するという生徒は、最初は少なかった。しかし、A高校からB高校へ受験先を変えさせることが目的ではなかったが、教師がA高校だった生徒の心を揺さぶることで、受験先を変更するという生徒もいた。その理由は、家の経済的な事情だけでなく、自分自身の将来を前向きに考えるであった。
- ・ 予想外の生徒の反応が出てねらいが明確になっていたため、視点を高校だけでなくその先の将来を考えられる生徒も出た。

A高校、B高校いずれも事前に授業のねらいを明確にしていたことで、生徒の意見を深めたり新しい視点から自分の将来について考えられたりする対応ができたと考える。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

道徳の授業内容を充実させるために学年会で指導案検討をするときに、ねらいや教師の思いを明確にして教師の間で共通理解を図り授業を行った。今回の資料では、生徒の反応に対する教師の対応について重点的に検討した。学年の教師全員で検討することで授業のねらいを明確にすることができたり、教師の対応に一人で検討していたときには見えなかった部分を補い合ったりすることができた。

特に1枚のシートに各教師が自分の考えを書き出して検討していくことは、以下の点で授業内容の充実につながったと考える。

- ・ 発言では遠慮することがあっても、書くことで周りを気にすることなく全教師が自分の考えを出せる。
- ・ 書くことで自分の考えを整理できる。
- ・ シートに書かれた他の教師の意見を見ること

で、新しい考えが出てくる。

- ・ 生徒の多様な意見に全教師で対応することができる。
- ・ 教師の共通した思いが明確になり、授業のねらいを明らかにしやすい。

そして、教師が互いの個性を尊重し個々の技量を高めようとしながらまとまり、組織として対応することは、生徒の心の成長に必要な要素の1つであることを、1年を通じて感じる事ができた。それは、毎学期学校で生徒、教師の両方に実施しているアンケートの結果からも読み取れる。

生徒と教師へのアンケート

○ 生徒への質問

【道徳や総合的な学習、学活などで将来の進路や人の生き方、豊かな心のあり方について学ぶ機会がありますか】

○ 教師への質問

【道徳教育を充実させるなど、自分の生き方を考え豊かな心を持った生徒を育てようとしている】

	生徒		教師	
	人	%	人	%
よくあてはまる	77	41	21	68
ややあてはまる	86	46	8	26
あまりあてはまらない	15	8	0	0
まったくあてはまらない	2	1	0	0

注：12月に実施したアンケート結果

道徳に関わる部分で、生徒は3年生の数値のみ掲載

3年生の生徒は、豊かな心のあり方について学ぶ機会が「よくあてはまる」と「ややあてはまる」を合わせると87%いた。これは、毎週道徳の授業を行っていること、資料を集中的に扱うことでできるだけ授業のねらいをはっきりと示していること、指導案を教師全員で検討して授業のねらいを明確にして授業に臨んでいること、そして生徒の考えを模造紙に書き、廊下に掲示して自分たちで常に振り返えられるようにしているためと考える。

しかし、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した生徒が17人いる。この生徒たちに対してどのように心の豊かさの必要性を伝えていくか。単に授業技術の問題だけでなく、今自分の心を育てることは将来自分が親になったときに自分の子どもに行動の善悪を教えるときの基準になったり、大人になって社会や人とのつながりの中で人間関係を豊かにするために必要な

ったりすることを伝えていくことが大切になると考える。そのためにも、教師自身がどのような生徒を育てていきたいかという全体像をはっきりとさせて、道徳だけでなく日々の指導をしていくことがこれからの生徒の心の成長につながると考える。

2 今後の課題

道徳は1週間に1時間という制約がある。また個人、学級、学校全体という視点で考えることはあっても、学年単位で考える事があまりない。中学校では学年単位で活動することがあり、学年集団の向上のためにどのような授業を構想するかが課題となる。その課題を改善する方法の1つとして、学活の時間に体育館で学年全員が集まって生活上の課題について考え、道徳の時間に個人として振り返ることで学年全体の向上を目指す授業を今後検討していきたい。